

李白・盧同が語を直に用ひられて、しかも新意ありて、誠に當意即妙と云べし。むかし蘇東坡が方外の友に、僧佛印と云あり。常に東坡を迎ては、猪肉を炙として供す。東坡戯に一絶を賦す。遠公沽酒飲陶潛。佛印燒猪待子瞻。採得百花成蜜後。不知辛苦爲誰甜。此詩頓作の妙、異域同談といふべし。

一、鳩巢先生菅神の靈感を受け給ふ

先生少年の時、北郊菅廟へ參籠し通夜の時、自内陣白雲出で先生の全身を覆ひ候。此感應ありて以來、文章にも通達被成候と申事、某久敷承及候得共、神怪の儀、請問いたす事も先は不入事と存じ罷返申候。今日偶菅廟靈驗の事共、座談有之候に付此事奉問候所、十八歳の時於京師木下順菴に從ひ、令勤學候内存寄候は、學問といへども無神助てはと存じ願書を調申候。其願書の趣は、名を後世に揚て、父母に令名を遺すは孝の一事也。空しく生候ては、百歳を保ても何の詮も無之候。文章を以て天下に聞候様に、神助を奉願候と申趣にて候。扱一夜致通夜度心掛に候得共、北野の邊は遊女町多く候故、年わかき内師友の聞を憚り、右の

趣を順菴に達し、二月頃と覺候、願書を内陣へ捧候て、籠り屋と申板さくみの内へ、只獨り參籠いたし候。社僧より行燈に油を竹筒に入添て差越候。扱夜着の物も指越候。然ながら拙子存寄り候は、七日七夜參籠の者さへ有之候。只一夜の儀に候へば、臥し申には不及儀と存じ臥不申候。深更に及候て、しきりに眠を催し候ゆゑ、兩手を組て其上へ額をのせて、少し眠り候様に有之候所、内陣より雲起り全體を覆ひ候様に覺候て、其時信心の感ゆゑにや、神靈の影迎被成候様に覺候て、眠も覺め申候。是は感應のしるしと存じ、彌晝夜致勤學候。先生十六七歳の時、自願の誓願等別録有之候。此の時の願文と相傳へし。右の雲は白雲と承及申候。色は如何御覺被成候やと申候へば、色は黒く有之様に覺申候旨被仰聞候。扱御申候は、其後賀州にて段々結構に召使はれ、文章の御用相勤候うへ、江戸へも被召出候うへにて見候へば、菅廟への願は、御叶へ被成と申者に候。一身の幸不幸は天命に有之候。然れば菅廟へは、急度御禮を可申上事と心附候得共、薄祿の身なれば力不及候。せめて一月に一度あて參拜は可仕事と存じ、近年に成り其心附候て、月の二十五日ごとに、湯嶋天神之廟を拜し申

候。前月廿五日參詣いたし候所、雨にあひぬれ候に付、歌をよみ申候。

村雨のかゝれる袖におもへとや神もぬれぎぬきにし昔を  
某申候は、此御歌には神感も可有之候。私儀正徳二年の頃  
二・三月と覺申候。一月の内五日・十五日・廿五日に、夢想の  
句三首を得申候。其内二首はわすれ申候。一首の歌はぬれ  
ぎぬの事に御座候。右の御歌にて存じ出し候とて、夢想の  
句を唱ふ。

ぬれぎぬを北野の末にぬぎ捨てうつりぞきぬる梅の花垣  
先生、扱々能く聞候歌とて御賞翫被成、扱被仰候は、住吉内  
藏助物語に、其身京都に居候所、ある町人へ浪人より、名  
物の茶入を預け置候。年を経て其茶入かへし候様に浪人申  
候。相尋候所みえ不申候。家内種々に搜索いたし候へども  
無之候。此町人貞信なる者にて、最早一分も立不申様に存、  
迷惑いたし候に付、此上は神力を頼可申外無之候とて、北  
郊の廟へ參籠仕候。感應有之様に覺候とて罷歸、布上下の  
ま、煙草を給へ罷在候所、臺所へ乞食體のもの参り、此作  
り花買て給り候様にと申聲いたし候。兼て作花入用の事候

に付、その花求候様に申付候。扱作花求候て、何ぞ箱へ入  
置申度候て、棚にいとふるき箱有之候に付、その箱へ入可  
申とて蓋を開き候へば、その内に右の茶入有之候。偏に靈  
驗のゆゑとて、其人内藏助へ咄し申候。茶入は則浪人へ返  
し遣候。詞曰

一、菅神八百年祭の奇瑞

元祿十五年二月廿五日は、菅神八百年遠諱の祭あり。本藩  
より爲御代參、前田修理被遣候。御太刀奉納の時御徳仁岸若  
御門敷許  
修竹菴能順なども有合候て申候は、七百五十年の時雷鳴い  
たし、奇特の事と申候。今日は如何可有之やと申所に、無  
間雷鳴いたし候。各不思議の事と致感動候。

一、鳩巢、黒田侯に經義を講す

筑前秋月城主甲斐守黒田長治、五十五歳。二今茲四月參觀の後、  
十三歳。  
鳩巢先生へ佐々木萬次郎を紹介として、請待有之度のよし  
申來候。先生辭退候て何方へも御斷申達、先は不罷越候。  
年寄難勤候に付、初て被召候方へは別て斷申候間、此旨御  
聞届被下候に仕度旨、則萬次を以て被申入候。重て萬次を  
以て申來候は、在所を罷出候時分より、今年於江戸新助殿